



扉温泉へ向かう県道和田線

雨氷災害が発生！倒木で道路が通行止め！

1月29日(金)の午後5時過ぎから、入山辺地区で雨氷による災害が発生しました。雨氷とは、過冷却された雨滴が樹木や電線等に付着して凍結し、樹木等が透明の氷で覆われる現象のことです。今回の災害は、付着した雨

氷の重さに耐えることができなかつた樹木が次々と倒伏したことで、道路を塞ぎ、電気などのライフラインを寸断したものです。これにより、扉温泉方面は128人(うち明神館で110人、松の湯で17人、民家1軒で1人)、三城地区は46人、王ヶ頭ホテルは118人の計292人が孤立状態となりました。市は29日(金)の午後10時50分に松本市災害対策本部を設置しました。そして、入山辺地区地域づくりセンターを現地連絡所として、関係機関を集めて対応を協議しました。倒木の伐採作業では、市内建設業者等をはじめ、美ヶ原事業所連絡協議会、そして、財産区関係者などの地元住民も協力して懸命に作業にあたりました。その結果、30日(土)の夕方には、扉温泉方面と王ヶ頭ホテルの宿泊客などは無事に下山

館報
いりやま

平成28年3月1日現在

世帯数	882戸
男	1,006人
女	1,078人
総人口	2,084人



雨氷の松

雨氷災害の体験談

かけす食堂(松の湯西側)の澤渡里美さんから、雨氷災害で孤立状態になったときの様子を伺いました。

災害発生前の様子

29日(金)の午後3時30分ごろ松の湯に入浴して帰宅された方が、倒木で道が塞がれていると引き返してきました。主人(光行さん)が現場の様子を見に行き、チェーンソーで倒木除去を行いました。作業中もバキバキと凄まじい音を立てて、次々に木が倒れてきたようです。

三城町会と駒越町会へ向かう市道も通行可能(二部片側通行)となりました。停電は31日(日)の夕方から翌日未明にかけて復旧しました。

孤立状態で一夜を明かして思いがけず帰宅困難になっただけ苦痛を感じてほしくない。その思いで電気が使えない暗闇のなか、お粥様にうどんや煮物などの温かい食事を提供しました。夜は特に冷え込みました。毛布やストーブが限られていたため、大型のペットボトルに温泉やお湯を入れて湯たんぼ代わりにしました。

下山したときの様子

当初30日(土)も下山することはできないと話がありましたが、持病で薬が必要な方も多く、また、建設業者や林業事業者の皆さまのご尽力によって早期に下山することになりました。歩いて下山する際は、警察や消防関係など、大勢の方々が見守ってくださったので安心しました。

災害後に思うこと

今回の災害で山の景色が著しく変化しました。道路の倒木は撤去されましたが、山にはまだ手つかずの箇所が多くあります。県や市だけでなく、有志やボランティアを募って作業ができないものかとも思っています。大好きなこの場所が、少しでも早く元の景色に戻ってほしいです。自然災害の脅威を目の当たりにして、防災の必要性を強く感じました。

集落名案内板設置

入山辺地区の将来ビジョンを考える会(愛称:こんな山辺にするじゃん会)では、入山辺にある25集落の集落名の案内板を、平成26年度〜27年度にかけて設置しました。

入山辺地区には13町会あり、昭和59年までは数字で町会名を呼んでいましたが、昭和60年からは、現在の集落名を使用した町会名になりました。一集落はそのまま、二集落のところは連名で呼ぶこととなりましたが、寺所・包石・竹の下・中村・北厩所・小仏・宮街道の集落名は町会名となりませんでした。

集落名がわかることで、地区内外の皆さんの集落の認知度が向上し、災害時などに迅速な対応が可能となり、安心安全の向上が期待されます。(町会名変遷の詳細は、「入山辺文化誌」上巻五頁参照)



入山辺文化誌を讀みて

竹の下 丸山義十
 昨年入山辺全戸に配られた、入山辺文化誌を、知人に奨められて読んでみた。読むとは言っても拾い読み程度のものだが。先ず最初に感じたことは、上下2巻からなる1000頁近い文化誌の大冊を、よくぞ完成したものだと思ひ、編集に携わった方々の苦勞を偲び感謝したことだ。

この入山辺文化誌は、入山辺地区に現存する所謂文化遺産なるものを網羅し、解説を加え編集したものと、創刊号から400号までの公民館報の縮刷版を合冊したものとかなつてゐる。

文化資産について

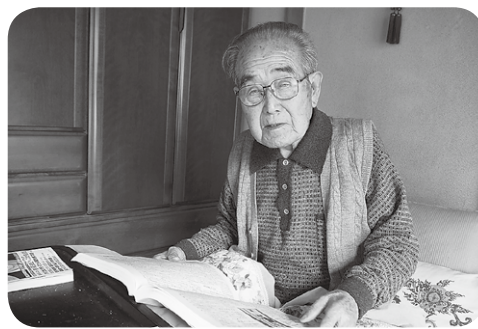
古代から伝えられてゐる入山辺地区の生い立ちについての解説を行い、また文化遺産については、入山辺地区が現有する有形無形の文化財についての解説を行っている。更に詳しく13町会別の文化財を、伝統行事・石造物・建造物別に説明をし、また文化財の所在地を文化資産マップで示している。

この文化誌に記載されている文化財の多くは、科学文化のない、自然と共に暮らして

いた古代入山辺住民の生活の中からあみ出された、信仰上・信心上の処産であり、レクレーションの一面を窺えるものもある。
 未永く伝承し保存して、古代入山辺住民の生活を偲んでもらいたいものである。

公民館報について

公民館報については、昭和24年10月に創刊されてから、平成26年9月の発刊を以つて、400号に達した。其の間、昭和29年8月に松本市との合併があり、入山辺公民館報から、松本市公民館報【入山辺版】へと移行した。入山辺公民館報当時は、使用する紙面も多く、村の予算決算等村政に関する事から、各種情報、村民の意見、エッセーなど、多方面にわたつて収録し、



98歳、お元気です。

人権啓発推進協議会の視察研修を行いました

2月21日(日)に人権啓発推進協議会の視察研修を行いました。視察先は「山梨平和ミュージアム」石橋湛山記念館」で17名が参加しました。

当ミュージアムの浅川理事長から直々に、甲府空襲の実相や、石橋湛山の思想等について説明をいただきました。

甲府空襲は、1945年7月6日の深夜から7日未明にかけて起きたことから「たなばた空襲」とも呼ばれてゐます。アメリカ軍爆撃機B29から投下された焼夷弾によつて、一夜にして死者1,127名、負傷者1,239名を出し、甲府市街地は焼け野原となりました。

また、当時の学校教育について教科書等が展示されておりました。子ども達は幼いころから、戦争は正しいもの、戦死することが名誉あることだという歪んだ教育を受けておりました。戦争を肯定化する風潮を創り、広げ、言論の自由



を奪うことで、終戦に至るまで多くの国民が犠牲となり、また、耐え難い悲惨な体験をしました。

石橋湛山は、山梨県出身で第55代内閣総理大臣に就任した人物です。政治家になる前

図書の入替えをしました

3月9日(水)に入山辺公民館図書室の図書を約600冊入れ替えました。

また、南方町会の赤羽義徳さんから約200冊の書籍を寄贈いただきました。

寄贈本には、全集や作品集等が多数あります。「原色日本の美術」は21冊、「奈良の寺」は21冊、「現代文学大系」は65冊、「現代の文学」は32冊、「日本の創造力」は15冊、

は、東洋経済新報社で記者として活躍していました。戦時中、言論の自由が厳しく統制されていたなか、国の領土拡大や軍備拡大路線について、確固たる信念を持つて批判するなど、時代の潮流に流されずに主張し続けた、当時において大変貴重な存在でした。

昨今は憲法九条改正の動きが加速するなど、時代は新たな局面を迎えています。再びこころした悲劇を繰り返さないためにも、戦争の悲惨さや平和の尊さについて、戦争を知らない世代が学び、後世に伝え続けていくことが大切なのではないでしょうか。



白井吉見の「安曇野」は5冊、「夏目漱石作品集」は10冊あります。その他にも単行本等が約30冊あります。

全集の一例を挙げますと、「日本の『創造力』」は、日本の近代・現代を開花させた470人の特集したものであります。今日の日本を築くために奮闘した、先人の足跡を辿ることが出来ます。

この機会に図書室へお立ち寄りいただき、本を読んでみてはいかがでしょうか。